

1111111111

「秋だよねえ」

思わず口に出た言葉が、思ったより遠くに響いた。

せつなが仲間になつて2ヶ月ちよつと。

「このところ、ラビリンスのふたりも見なくて平和だし。おもいつきりダンスの練習やったあと、みんなでおるちゃんの店の丸いテーブルで休んで。あたしは、空を見上げてぼーっとしてただけど。」

「なによラブ、いきなり」

だから、左どなりのミキさんに言われて、ちよつと考えちゃった。

「いやさ、ついこないだまで、運動すると飲み物欲しくなつたけど、今は食べ物が欲しいなー、とか。秋っぽい気がして」

「なんだっけな、そんな言葉があつたよつな気がするんだけど。」

「食欲の秋？」

「そうそう」

ブッキーの言葉を聞いて、あたしはパンツと手を鳴らした。簡単な言葉ほど忘れるもんよ。知らなかつたわけじゃないよ。

「じゃ、このジューズは要らないわね」

「あ、まってまって！ いらないうんて言つてないつてば!!」

左から手が出てくる感じがしたんで、あたしは思いつきからだ起こして先にコップつかまえた。

冗談なのはわかっているけど、ミキさんはときどきギリギリまで突っ込んでくるからな。

「ねえ、ラブ」

手に持つちやつたコップから、とりあえずジューズ口に含んだところで、右どなりのせつなが声かけてきた。

「ん？」

さつきから声がしないなー、とは思つてたんだ。み

3 こいこいのこい

んな一緒なのに、ひとりですつと本読んで。だから、やつとこつちに参加してくれるんだって思ってた。あえず返事したんだけど

「こいつて、なに？」

まっ正面のブッキーが、あたしの吹いたジュースまみれになるまで、1秒もかからなかった。

「だいじょぶ、お嬢ちゃん？」

「は、ふあい　だいじょぶね」

タオルもってテーブルにやってきたかおるちゃんに、ブッキーが答えてる。あっちゃあ、思いつきりやつちやったあ。

「ラブちゃん　ジュース、禁止」

ああ、ぼそつて言いながら、ブッキーがタオルから目だけ出して、じとつ、とこつち見てるよあ。

「ごーめん、ごめんってブッキー」

まだむーつ、としてるなあ。あとでドーナツおじつてあげなきゃ。

それはそうと

「どうしたの、せつな？　そんないきなり」

ミキたんが声かけたら、ちよつとぼーつとしてたせつなが、かばんから何か取り出した。本、が何冊も？

「借りた本よ。この前、いろいろ借りたでしょ」

ああ、そつえば。

あたしたちとダンスしたり、一緒に学校にも行ってるけど、みんなの考えることがまだちよつとわからない、とか言つて。みんながよく読んでる本、借りまくつてたんだっけ。

「ずつと読んでるのよ。これでもう10冊目。なんだけど、何度も何度も出てきてね」

なんだか、やつぱりぼーつとした声だなあ。いつもとちよつと違う感じ？

「出てくるって、恋が？」

「そう 場所も人も共通点がまったくないのに、みんな最後は『こい』になっちゃう。なんなのかしら、これ？」

「あー、そっか。思い出したよ。ここ何日か、せつなの部屋の電気、いつ見てもつきっぱなしだったんだっけ。ひよっとして」

「えーっと、ねえ」

「あ、あのね、せつなちゃん」

「おっと。考えてたら、口出しそびれちゃった。」

「あ、でも、机の向こうのブッキーが、顔ふいてた。タオルを両手で握って、せつなに近づいてるね。ここは、ブッキーにまかせちゃあつか。」

「ああ、そうね。そういえば、ひとつだけ共通点があったわ」

「せつなはまだほーっとしてるし。それじゃこのすきに、さっき飲みそこねたジュースジュース、っ」

「こいって、男の子とするものなの？」

「タオルを握りしめたブッキーが、またあたしのジュースまみれになるまで、やっぱり一秒かからなかった。」

「ラブちゃんジュース禁止いっつ!!」

「ブッキーの声と一緒に、あたしのジュースは取り上げられちゃった。」

「そのまま、ジャージのすそでむちゃくちゃに顔拭いてる。しょーがない。残りはあきらめよっか。」

「せつなはせつなで、まっ正面をほーっと見てるし。なんか声かけにくいなあ。」

「となりのミキたんも、頭に指あてて考えちゃってるなあ。どーしよ、これ？」

「どしたの、嬢ちゃんたち。漫才やるなら、テーブルをステージにでも変えよっか？ げは」

考えてる目の前が一瞬まっ白になって、気がついたらブッキーが2枚目のタオルでくるまれてた。ブッキーの後ろにはかおるちゃん そうだ。かおるちゃんなら!

「ん? オレがどつかしたの?」

「かおるちゃんは大人だから。恋のひとつやふたつ、当然あるんだよね!」

半分立ち上がりながら思い切ってそう言ったらかおるちゃん、あごに手を当てててちよつと考え込んだ。じゃった。

「コイ? コイねえ そりゃ、うん」

あれ? なんか、悪いこと聞いちゃったのかな?

そう思ってたら、かおるちゃんが頭かきながら、

「そうね、結構まえだけとき、お見合いしたことあるだよ。期待してたんだけどねえ」

あー、そっか。お見合いかあ それじゃ、すぐ恋が生まれる、ってわけにいかないかもね。

でも、ちよつと聞いてみたいかも、かおるちゃん

のお見合いばなし。ミキたんも、テーブルに体乗り出してきてるし。

「ホテルのロビーに行つてき、一緒についてきた親戚同士でいろいろ話してね。それから二人で外に出されるわけよ」

タオルから出てきたブッキーの目が輝いてるね。うん。

「ホテルの外は日本庭園になつててさ。歩いてくと築山（つとやま）があつたり池があつたりしてね」

うん うん?

「池をのぞくと、いると思つじゃない。なのに、いないんだよ。がっかりだよねえ」

え と。

「か、かおるちゃん? なんの話??」

「ん? だからコイでしょ、コイ」

ああ、やつぱりかあ よし!

あたしがテーブルに手をつくのを合図に、となりと正面と3人一緒に立ち上がつて、

「池の鯉じゃなーいつつ!!」

声が消えた瞬間、顔見合わせて同時に笑った。もう、長い付き合いだもんね。

ゴトン

でも次の瞬間、いつもと違う音と一緒にテーブルがゆれた。テーブルの上には、黒髪の丸い顔

「せつなちゃん、どうしたの!？」

あたしの口が動く前に、ブッキーが飛び出した。頭をゆらさないように、両肩に手をあてて

うとき、ブッキーはやっぱり早いわ。

「せつなちゃん、だいじょ」

少し離れて見てたら、ブッキーの動きが止まった。なに？

「ブッキー、せつ」

「しーっ。眠ってるわ」

言いかけた口に手を当てて止めてから、あたしはもう一度テーブルの上のせつなを見てみた。寝てる、けど。ゆっくり休んでるように、見えないな。

「こ、い」

もう、寝言でまで言ってるし。

「あー、こりゃ本っ当に知らないんだねえ
かあるちゃんが頬ほほづえつきながら言ってる。」

そっか。かあるちゃんは、せつながラピリンスの人だ、ってこと知らないんだっけ。

あたしもバカだなあ、遅くまで電気ついてるときに、気づいてあげられたはずなのに。

「でも、なにもこんなになるまで」

「ミキたんが、心配そうな顔でのぞき込んできた。うう、罪悪感わいてくるなあ。」

「せつなちゃん、真面目だから」

タオルをうちわ代わりに、ブッキーがあおいであげてる。

「そこが、せつなのいいとこなんだけど。でも、もうちょっとゆるくてもいいと思うんだけどなあ」

あたしもそう言いながら、せつなの背中をなでてあげた。いまでできることって、このくらい

「ずっとラブちゃんと一緒にいるのにねえ」

「ほんとな。なんでかしら？」

え、あたし？ って！

「どーいう意味よ、それ!!」

「しーっ!!」

しょうがないなあ。まあ、そうでもしないと重い空気に耐えられないのはわかるんだけどさあ。

「っぱり は」

ああ、またせつながなんか寝言言ってる。さっきより小さい声で、よく聞き取れない

「やっぱりに、わたしには、かあ」

その瞬間、ぼそつ、て低い声が、やけに耳に残っ

た。 かおるちゃん？

「ん？ ああ、なんでもないよ。それより なあ、

お嬢ちゃんたち。この子、おじさんに任せてくんない？」

「かおるちゃんに？」

「ちよつとあ。かわいい中学生に、なにする気？」

ブッキーとミキたんが首かしげてるのを横目で感じながら、あたしはまっすぐ正面を見つめた。かおるちゃんの、サングラスの中、やっぱりまっすぐ、あたしの目を見つめてる

「わかった。お願い、かおるちゃん！」

ピンクに、白に、黄色に、茶色

目の前を、なにかがぐるぐる回ってる。それをぼ

んやり眺めてたら、小さな声が聞こえてきた。

「 3人ね。とりあえず、みつつ、っと」

なんだろう？。そう考えていたら、目の前がだんだん明るくなってきたわ。

高くない天井に、小さな電灯。少し横を向けば、車のドア。小さなうなりと一緒に揺れるベッドは、よく見れば長椅子じゃない。

「おまけつぎで、ほれ行け」

声のする方には、サングラスの人。すぐ前にある機械を慣れた感じで動かしてる。

「かおる　　ちゃん？」

そう、ここはドーナツ屋さんなのね。車の中の長椅子で、私は寝ちゃってたんだけ。

だんだんはつきりしてきた目に、かおるちゃんのきれいな動きが映った。

機械から降りてくるドーナツをお皿に受けて、ひとつつつ、ひょいっと手にとって横半分に切って

そのままナイフにクリーム盛って、切ったドーナツにはさんで。

「これでみつつ、か。う〜ん　　」

チャラ　　ン

かおるちゃんの手がさわった何かが、軽い音を立てたわ。

あれは、ビンに入った　　お箸^{はし}？

「やっぱ、もつひとつかねえ」

なにをしてるんだろう？。ドーナツは出来立てが一番、って何度か聞いたのに、生クリーム詰めたドーナツを作り置きなんて

「かおるちゃん」

そう考えていたら、車の外から声が聞こえてきた。

「お、来たね、ぼっちゃん」

小さな人影が、元気な声をかけてきてる。

かおるちゃんは返事しながら、いま作ってたドーナツを袋に　　え？。だって、まだ注文もしてない

のに？

「今日はこいつらもいるから、クリームドーナツ3

つ いや、4つね！」

「あいよ。ほれ、おまち」

小さな子どもが、目をまん丸にしてるわ。

「さっすが、かおるちゃん。早い早い！」

「早くつたつて手は又いてないぞあ。又クヌクはそ
るそる欲しいけどね。げは」

「ありがと！ ほら、みんな、ドーナツだぞ」

喜ぶ声が、次第に遠ざかってゆくのを感じながら、
私はじっと見つめていた。

今さっきまで作っていたもの 四つ、クリー
ムドーナツがあった場所を。

「まいどっ！ あ、起きちゃった？」

子供を見送っていたかおるちゃんが、私の方を向い

た。いままで起こさないようにしててくれたみたい。

「私、倒れてたのね」

ふう、とひとつ息ついたら、顔の上にコップが出
てきたわ。

「寝が足りなかったんだろ。ほい、ジュース。甘い
もんは、頭に効くクスリ、つてね」

私は起き上がって、ジュースを受け取ると、一気
に飲み干した。

「おー、ご立派。ずいぶん、無茶したみたいだねえ」

口元が笑ったまま、私のことをじっと見てるわ。こ
の分だと、色々聞かれちゃってるのね。

「やっぱり、恋ってわからないわ」
私が少し目をつむってそう言つと、軽い笑い声が
響いてきた。

「恋が何か、はっきり言葉で言うヤツがいたら、と
りあえず殴っていいよ」

え？

いきなりそう言われて、私は思わず目を見開いた。だって、どの本を読んでも恋はあったのに。みんなに聞いてもわかっているみたいだったのに。

「それじゃ、みんなが言ってる恋って」

「ん？ みんなそれぞれ別モノ。なんとなくわかっているだけ」

「ええっ!?!」

私の目の前に、いきなり崖ができたような気がした。みんなの言っていること、本に書いてあること、同じ言葉なのに、全部が違っているって

「それじゃ、どこを探したら」

「でも、愛は持っているでしょ。お嬢ちゃん、占いやつてたんだから」

目の前の崖が、かおるちゃんの顔に戻った。でもなにを言われたのか、頭の中に入っていない。愛

占い？

「知り合いの占い師が言ってたよ。占い師に必要なのは、愛情だ、ってね。」

目の前に、まるつきり知らない人が来てさ、それをみんな占うつてのは、愛情たっぶんな人じゃないと出来ないもんよ」

私は思わず目を背けた。

そう。かおるちゃんは私のこと、占い師だと思ってたんだわ。だから私のこと、こんなに気にかけてくれていたのね。

「私の占いなんて、そんな真面目じゃない。インチキなものだったわ」

これでまたひとり、私を嫌う人が増えた。仕方ないわ。みんな、私が出たこと

「でもさ、みんなは喜んでなかった？」

え!?

私は、ぱっと顔を上げた。やさしい声に、かえってびっくりしちゃったんだもの。

「喜んで いた、けど」

何を言ってるのかしら？ いくら喜んでいたら、

それが正しいわけじゃ

「いやあ、お嬢ちゃんから聞いてちゃあいたけど、思った以上だよ。まさか、その気もないのに占いできるほど、愛情たっぷんとはねえ。」

それなら、恋もなんとなくわかるよ。そのうちね」
かおるちゃん的笑顔が変わったわ。にやっとした顔だったのに、いまはヒゲからあふれるくらいの笑顔。

もしかして、本当　なのかしら。

本当に、私にも、たっぷりの愛情が　なんとなくでさえ、恋もわからないのに？

「おっと、常連さんだ。ちょっと待ってね」

かおるちゃんがちらつ、と窓の外を見て、そのまま機械の方を向いた。

私も窓の外を覗いてみると、公園の階段を日傘をさした人が登ってきているわ。白くて、大きな犬を

連れて。

チャラ　ン

あ、またさっきの音。

「チョコにいちご、か。珍しいなあ」

振り向いた先ではかおるちゃんの手が、こげ茶とピンクのチューブを握っていた。

機械から降りてきたのは穴のない丸いドーナツ。それに濃い緑のと、こげ茶のと、普通のドーナツがひとつづつ。こげ茶と普通のチューブからクリームかけて、チョコスプレーをふりかけて　そうしているうちに、窓に人影が見えたわ。おばあさんと、白い犬の顔が並んでる。

「珍しいのはどちらかしらね？　久しぶりに聞きますよ、あなたのそんな話」

「聞こえてたんですかい？　あいかわらず地獄みつと失礼。注文ですよ、どうぞ」

そう言いながら、もう包み終わってる袋を手を持つ

てる。まさかとおもうけど、やつぱり

「それじゃ。あんドーナツに抹茶ドーナツ、それと チョコもいただける？ 孫の友達が好きみたいな。あと、いちごも」

やつぱり、ぴたり正解。もう、いいかげん驚く気にもならないわ。

「ああ、なるほどね。チョコなんていつもは注文しないのに、変だなあと思ってたんですよ。で、いちごは？」

面白そうに笑いながら、おばあさんが受け取った袋から、ピンク色のドーナツを取り出して、かおるちゃんの手にのせた。

「甘酸っぱいドーナツは、そちらの子にね」

え？ 私？

「好きを好きと言える気持ちも、好きと言えない気持ちも、どちらももつてもだいいことですよ。どう呼ぶかなんて、どうでもいいことじゃない？」

それじゃ。行きましょ、忠太郎」

皺しわいっばいでもきれいな顔がウインクして、おばあさんが帰ってゆく。

その後姿を見ていたら、思わず言葉がこぼれたわ。

「好きと言える気持ち。言えない気持ち」

ふう、って息ついた音にを振り向いたら、かおるちゃんが両手を上げていた。

「やれやれ、あのくらいだね。恋がなにか、言葉で言われても殴れないのは」

恋 いまのが、恋？

わからない けど、顔を見なくなる言葉だわ。

ラブたちの。

「そういえば、ラブはどこに？」

なんで忘れてたのかしら。目を覚ましてからずっと、ラブたちのことが頭から抜け落ちていたわ。

「あ、お嬢ちゃんたちなら、もうじき戻ってくるよ。」

近くで心配されてたら、寝にくいでしょ？」

ラブたちが、私を置いていく 以前だったら寂しかったけど、いまはわかる。

「信用されてるんですね、かおるちゃん」

「まあ、お嬢ちゃんたちがちっちゃい頃から、ここにいるからね」

窓の外を眺めて頬づえついて、かおるちゃんがそう言った。何を見ているのか、私も見たくなくて身を乗り出したら、

「いつでも、さ」

ぼつん、と隣からひとこと聞こえてきた。

窓の外には、広い公園、ボール遊びする子供に、散歩してるおじいさん。そのむこうに、歩いてくるラブたちが見える。

「いつでも、ここに来ればドーナツ屋がいる、って、いいと思わない？」

きっと、かおるちゃんも同じものを見てる。そう思ったら、気持ちかわかる気がした。なんとなく。

「ただ、いるだけ なんだ」

「そ。ただいるだけ。でも、来ればいつでも必ずいるの ぐは」

公園のラブたちが少しづつ大きくなっていく中で、私にはわかった。なんとなく。

かおるちゃん自身のことなんだ、『愛情たっぶん』って。だとしたら

「それ、すごくいいと思う。私も、そうりたいのかも」

その瞬間、頭の上があつたかくなった。

「そっか。そんならオレたちは仲間だ。お嬢ちゃんも名前で呼ばないとな。えーと 『せつちゃん』、かな？」

私はまっすぐ目を見て、うなずいた。

「ラブのおかあさんも、そう呼んでる。それでいいわ」

「あはは。あのオネーサマと同じかあ そりゃちょっとマズいかな。んじゃあ、『せつちゃん嬢ちゃん』にでもしとこっか」

かおるちゃんが言い直したとたん、顔が勝手に熱くなってきたのが自分でわかる。前から気にはなっていたけど、名前につけられると

「それ どうしても『嬢ちゃん』入れないとダメなの？」

「だめだめ。オレにとっちゃ、みくんなカワイイ嬢ちゃんなんだからね。くは♡」

はあ。思わずため息ついちゃうわ。

けれど、どうしてそんな名前にするのか、わかる気がする。なんとなく。

そう、なんとなく。そうやって、私にも恋がわかっていくのかもしれない。

もし私の中が、かおるちゃんと同じくらい『愛情たっぷり』なら。

「せつなっ！」

ドーナツ屋の車の中から手を振ってるせつなを見つけて、あたしはおもいつきり駆け寄って行った。「ごめん、気づいてあげられなくてっ！っってっうわわっ!？」

抱きつこうとした瞬間、両腕が重くなってバランスが って、ブッキー!?!ミキたん!!?

「ダメでしょ、ラブちゃん!!」

「それじゃ逆効果だって、さっき話し合ったばかりじゃない!っっかりしなさいよ!!」

だって、せつなが、せつなが あれ？

車の中で、せつなが苦笑いしてる。

「せつな、もう恋って言っても大丈夫なんだね？」

さっすが、かおるちゃん。あれだけ思いつめてたせつなを、たった数時間で治しちゃっんだもん。やっぱ、頼りになる

「大丈夫もなにも 洗いが美味あじしいのよね？」

へ???

「かおるちゃんに聞いたわ。あとは味噌仕立てでお鍋、これは冬だから、もう少ししてからね」

腕の重さが、いきなりなくなった。おそろおそろ振り返ったら、ふたりが目をまん丸にしている。もちろん、きつとあたしも。

「せつ」

「せつなちゃんがっ」

「こわれた!?!」

3人一緒に車を見た。せつなのとなりでサンングラスが笑ってるよ。

「ちよつとお、かおるちゃん!?!」

じろつとにらんで近寄っても、やっぱり笑ってる。それも、ふたりとも。

「ん〜? でもさ、やっぱりコイはコイでしょ。なあ、せつちゃん嬢ちゃん?」

「ね♡」

なーんか呼び方まで仲良くなっちゃってるし、どー

なってるのよ、このふたり。

「あゝあ。失敗だったかなあ、かおるちゃんにまかせちゃったの」

—おしまい—